

詠む広場

毎日俳壇

井上 康明 選

片山由美子 選

小川 軽舟 選

西村 和子 選

天上の兜太ふむやうるか汁

浜松市 久野 茂樹

△評▽うるか汁は、うるかにアユや野菜を入れた汁料理。天上の金子兜太が秋の味覚を楽しみくつろぐ。一献傾けているのだろう。

その奥に鯉の凝れる水の秋

東京 望月 清彦

△評▽澄んだ水底に、マゴイが沈んで動くともなく動く。水の秋という季語が広やかである。

祈りとは千の鶴折る黒ぶどう

町田市 枝澤 聖文

秋天へ飛び立ちさうな千鳥破風

周南市 九内 千沙

天高しヘリコプターの離陸音

伊丹市 噂野アンドウ

ぎす鳴くや影の大きなマリア像

弥富市 富田 範保

木に岩に仏かたぶき小鳥くる

甲府市 清水 輝子

縁ありし町遠景に秋夕焼

春日市 林田 久子

鬼柚子を大風の来て揺らしけり

市川市 高野 厚夫

鎮座する一升瓶と秋祭

札幌市 岡崎 実

喉元に熟柿の甘み残りをり

奈良 高尾山 昭

△評▽柔らかく熟した柿の味わいは格別なもの。食べ終わっても甘みが喉元に残っているというのが絶妙で、説得力がある。

栗をむくラジオドラマを聴きながら

和歌山 くわはらみ

△評▽連続ドラマの今日の回を聴いているのだ。皮をむき終わるまでにちょうどよさそうな時間。

わが町と思ふ秋灯見おろして

神奈川 中島やさか

菊の香に迎へられたる参観日

東京 渡邊 顯

ふるさととは百年同じ柿熟るる

常陸太田市 館 健一郎

秋夕べ人それぞれの窓明り

東京 荏原 昭子

切り取りて両手に余る葡萄かな

東京 高田 和子

秋の雨鷺はしづかに向きをまふ

西宮市 平田 あい

秋の月母の寝息を聞く窓辺

安城市 榊原 宏照

聖堂の裏に散らばり銀杏の実

土岐市 水野 雅子

新涼や朝一番にパンを買い

東京 国島きみこ

△評▽近所のパン屋が開くやいなや焼きたてのパンを買い。休日の遅めの朝食をゆっくり楽しむのだから。

日曜日干し竿の露拭ひけり

東京 茂田野マイ子

△評▽たまった洗濯物を日曜日に片つける。今朝は露が降りたことに季節を実感しながら。

朝を呼ぶ小鳥来てをり夢の端

東京 伊藤 公一

床を摺る能の白足袋秋立ちぬ

大阪市 湯浅 喬

売れさうで売れぬ売地や猫じやらし

米子市 永田富基子

新涼の雲の走れる湖上かな

福岡市 松尾 ねこ

人去りて色なき風の石切場

西尾市 金子 恵美

水澄むやせせらぎの音流るる

札幌市 若林 陽光

瓢箪や復刻版の文庫買ふ

鹿児島市 岡村梨枝子

ニュートンの自筆の手紙星流る

那覇市 上江洲一石

秋葉し子に駄までの道長し

小田原市 林 梢

△評▽日差しも風も心地よくなり、道端には秋草や草の穂が揺れ、虫や小鳥の声も響く。好奇心旺盛な子には楽しい季節だ。

幼子のひとり遊びの螢草

相模原市 はやし 央

△評▽可愛いツクサの花の構造は見れば見るほど不思議。小さな子どもの指にかなっている。

読みきれぬほどの短冊秋の宮

大阪 池田 壽夫

雷魚棲む水の深きへ稲光

西宮市 大谷 睦雄

ひたすらにボールを壁に秋の暮

河内長野市 平野 彰一

雲梯に見上ぐる空の高かりし

横浜市 正谷 民夫

生きていることが恩寵星月夜

東京 青木 公正

小鳥来る子供の好きな水溜り

東久留米市 夏目あたる

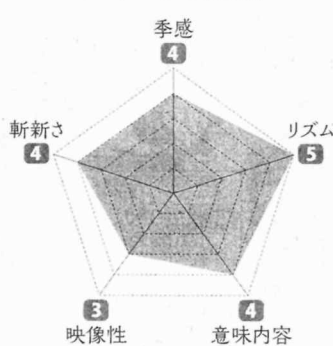
しづるや伊賀に寺町紺屋町

伊賀市 福沢 義男

幽霊のやうに枯れはて彼岸花

河内長野市 滝尻 芳博

チャートで採点



注目句
「俳句ふてふ」

円堂実花

季語「小鳥来る」の一句。俳句に用いられる「小鳥」は、秋に渡って来る小型の鳥の総称で、大陸から渡来する鳥たちや、山地から平地や市街地に下りて来るなど、狭い範囲で渡りをする鳥たちを言います。歳時記によれば、「小鳥来る」を「渡り鳥」の子季語としています。

掲句の「喃語」は、赤ちゃんが意味のある言葉を話せるようになる前の段階で発する、特有の音声のことでしょう。それがふと、意味のある言葉に聞こえたというのです。健やかに成長する子を見守る喜びと、爽やかに過ごしやすい季節を迎えた喜びを取り合わせたことで、平凡で穏やかな日々への感謝や明日への希望が感じられる一句になりました。(えんどう・みか「俳人」)

アプリ
俳句てふてふ

全国景勝地俳句コンテスト 俳句てふてふは富士五湖や耶馬溪など133景勝地にちなんだ俳句を募集中。1930(昭和5)年に高浜虚子選で実施した「日本新名勝俳句」の後継企画。選者は俳人の稲畑寛太郎さんと星野高士さん。詳しくはアプリ内の応募要項をご覧ください。



アプリのダウンロードはこちら